

へ衣の系譜

——狭衣・小夜衣・苔の衣——

豊 島 秀 範

一、論点の所在

物語文学史上に『源氏物語』が成した額の高さは、いまさら言うに及ばない。その後で成立した物語のほとんどが、表現は勿論のこと、人物像の設定、物語の構成上に、『源氏物語』の多大の影響を被っていることから、それは明らかである。しかし、だからといって、『源氏物語』の存在が、その後の物語を発想させる唯一の源であるとはとても断言できない。影響を被るということと、各々の物語が発想されてくるということは、必ずしも同一ではないからである。この当然すぎる確認を敢えてここでするのは、擬古物語と称される多くの物語を、『源氏物語』の呪縛から解き放ち、各々の物語の存在を充分に意識し、その上でその構想なり、発想の源なりを再確認しなければならないと考えるからである。無論、物語作品においては、いったい作者の全き創作など考えられない程に、様々な影響が認められるのは周知の通りである。ここに取り上げようとする『小夜衣』『苔の衣』も、その例に漏れない。しかし、今はその影響の多寡を論じるのが第一の目的ではない。また、各々の物語の内容について論じること別の機会に譲ることとして、ここでは、『狭衣』の後に『苔の衣』『小夜衣』と続く、いわばへ衣の系譜とも言うべき視点から、それらの語句の発想の源について、主に和歌との関係において探ってみようと思う。

二、『狭衣物語』——衣の系譜——

いろ／＼に重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣(注1)

帝は、第二皇女(女二の宮)を狭衣に与えようとするが、源氏の宮に思いを寄せている狭衣はそれを承諾せず、一人詠んだ歌である。物語が開始されて間もなくの所に位置するこの歌は、以後の物語展開の方向を提示すると共に、物語の題名の源にもなっていることから、極めて重要な意味を持つ。だが、それ程重要な「狭衣」という語句にもかかわらず、物語中において他に一例を認め得るに過ぎない(注2)。

『狭衣物語』以前の物語の題名を考えてみるに、『竹取物語』『宇津保』『落窪』は、作品の主人公と目される人物の置かれていた状況を象徴する表現である。『源氏物語』は光源氏の物語であって、主人公の名称によって名付けられており、その点では『狭衣』の場合と類似しているものの、それは結果的にそうなのであって、正確に言えば、『狭衣物語』の主人公であるために、彼を狭衣と称しているに過ぎない。物語中において、彼を(源中将・二位中将・中納言・大納言・大将・左大将・帝)などと称することはあっても、「狭衣」と表記されることはないからである。その意味からも、「狭衣」という名称には注意を払わなくてはならない。

「狭衣」とは「衣服・きもの」の意であって、「へさ」が接頭辞であることは言

うまでもないのだが、その〈狭衣〉という表現を求めてみると、意外に少ないのである(注3)。その中で、次の用例が注目される。

(1) 人妻に言ふは誰が言さ衣のこの紐解けと言ふは誰が言 (万葉集、卷二・二八
六六、正述心緒)

(2) さ衣の小筑波嶺ろの山の岬わすら来ばこそ汝を懸けなはめ (万葉集、卷一四・
三三九四、東歌)

(3) 狭衣のつまも結ばぬ玉の緒の絶えみ絶えずみ世をやむすばむ (蜻蛉日記下)、
大系本二九三頁)

(4) 片敷きし年は経れども狭衣の涙にしむるときはなかりき (同、三二五頁)
『万葉集』『蜻蛉日記』にある歌である。四例とも「狭衣の」という形であるが、(2)は〈へを緒〉に懸る枕詞であるが、その他は、(1)は〈紐〉、(3)は〈つま(褌)〉、(4)は〈片敷く〉という、いずれも〈へ衣〉との縁語関係で成立している。

内容的には、(3)(4)は道綱が女の許に贈った恋の歌であって(注4)、それは(1)(2)の例歌と同じといえる。〈へ衣〉が、男女間の恋情表現の手段として度々詠まれてきたことは周知の事実で、『狭衣物語』での「いろいろに重ねては着し……」の歌も、その流れの上で発想されたものである。その点では『狭衣』の歌が詠まれることに不思議はない。問題は、〈狭衣〉の表現に限定した場合、歌語であるこの用例が和歌にもあまりみられず、他には鎌倉期の物語『我身にたどる姫君』に一例あるに過ぎず(注5)、管見に入るところでは五例と、極めて少ないことである。さらに、その少ない用例と比較しても、『狭衣』の歌は、単に〈へ衣〉との縁語関係の上で〈狭衣〉が詠み込まれているのではなく、より深い意図が込められていることである。つまり、(1)(3)(4)などの歌が〈へ衣〉及びその縁語を詠み込むことで恋の歌が成立するという伝統的手段の域に留まっているのに対して、『狭衣』での歌は、その域を一步進めて、〈狭衣〉に恋の対象である源氏の宮その人を込めていることである。そこに、〈狭衣〉が物語の題名にまで成り得た理由がある。しかも、〈夜半の狭衣〉という、より新鮮で熟した表現になっていることにも注意しなくてはならない。なぜなら、『狭衣物語』成立以前には全く見られなかった歌

語〈夜はの狭衣〉が、その後は歌に詠まれるようになっていくからである(注6)。
〈夜はの狭衣〉の用例を挙げてみよう。

。閨の上にさしも時雨の廻来て夜はのさ衣絞侘つゝ (後鳥羽院『千五百番歌合』
卷九・三六九五二、判歌)

。古郷を夢にだに見む山賤の夜はのさ衣打も寝なゝむ (良経『秋篠月清集』卷三
・一八八一、「山家掃衣」)

。忍ばずはさでも袖を見るべきに絞りぞかぬる夜はの狭衣 (『新千載集』卷一
・一〇七三、俊成)

いずれも『狭衣』成立の百年余り後に詠まれている。さらに類例を挙げると、

。風さゆる夜はの衣の閑守は寝られぬまゝの月や見るらむ (『続後撰集』卷八・四
七九、順徳院、「冬閑月」)

。夢を待つ夜はの衣のうらなれば現に知らぬ玉も見てまし (『新後拾遺集』卷一八
・一五〇一、藤原為重)

。いかで猶夜はの衣をかへしても重ねし程の夢をだに見む (『新後撰集』卷一四・
一〇八三、藤原家隆)

。引きかけて涙を人につゝむまに裏や朽ちなむ夜半の衣は (『千載集』卷一三・八
一三、藤原定実)

など〈夜半の衣〉の用例は六例を数える(注7)。更には、

。さむしろの夜半の衣手さえゝて初雪白し岡のべの松 (『新古今集』卷六・六六
二、式子内親王)

の如き〈夜半の衣手〉の用例は三例が認められる(注8)。そして、〈夜半の狭衣〉
三例、〈夜半の衣〉六例、〈夜半の衣手〉三例は、そのいずれもが一二〇〇年代を
中心に、一三〇〇年代の初めにかけて詠まれたものである。実にこの時期は、後
に述べるように、〈へ衣〉に関連する様々な表現の歌語が登場するのである。そし
て、その源には、『狭衣物語』での歌が存在していたことを認めてよいであろう。
以上のように、『狭衣物語』の一首は、表現技法としては、衣を重ねるという、
それ自体は伝統的な発想法に依りながらも、一步進んで〈夜半の狭衣〉という歌

語を提示したことにより、かつ、それが物語の重要な要素を担っていて、物語の題名にまで仕立て上げられたことにより、〈衣・狭衣〉の語が人々に強い印象を与えることになったのである。以下に述べる『苔の衣』『小夜衣』などは、まさにそのような情況が直接の要因となって生まれてきた物語であると言ってよい。

三、『小夜衣』——〈小夜衣〉の用法——

『小夜衣』という題名は、物語中の和歌に八例、地の文に二例、都合一〇例の〈小夜衣〉の用例に依っている(注9)。その一〇例のうち五例は巻の上で兵部卿宮(主人公)と山里の姫君(女主人公)との贈答歌の中に見られる。その他は、巻の中で帝が山里の姫君(対の君)に言い寄る場面に三例、巻の下で帝が山里の姫君を偲ぶ所に二例、となっている。このように、『狭衣物語』では〈狭衣〉の用例が一例(後の回想を含めると二例)であったのに比して、『小夜衣』では物語のほぼ全体に亘って〈小夜衣〉の用例が見られる。しかも、その全てが女主人公である山里の姫君に絡んでいる。更に、その中でも、巻の上で、兵部卿宮が心ならずも関白の二の君と結婚した直後に、山里の姫君と贈答した一連の歌と地の文とに用例が集中しているのが注目される。

(1) 心にもあらず隔わつる、小夜衣重おもねし袖のかはくまぞなき(兵部卿宮↓山里の姫君)(注10)

(2) 小夜衣ううつれば変るならひとて憂き身に知らる袖の涙を(山里の姫君↓兵部卿宮)

(3) 年ふとも変らじものと小夜衣深くも思ひそめし色をば(兵部卿宮↓山里の姫君)

(4) 深かりき色とはいかが頼むべき浅あくも染めし小夜の衣を(山里の姫君↓兵部卿宮)

(5) (兵部卿宮は)重おもねも果てぬ小夜衣の浅あさを(山里の姫君が)恨み給へるもことわりに心苦しくて……。

これらの〈小夜衣〉は、縁語表現として、(A) (袖などを)重ねる(①・⑤)、

(B) (衣を染めることから、思い)染める(③・④・⑤)、(C) (心を)隔てる(①)、(D) (衣を打つことから、思いが)移る(②)、といった内容を引き出している。つまり、恋の成就(A・B)と、破綻(C・D)との両極の要素が含まれている。これは残りの五例においても同様である(注11)。その両要素の狭間に苦悩する心を象徴するのが〈小夜衣〉という歌語なのである。そこに『小夜衣』の主題も関わっている。同時に、そのような要素を持つ〈衣〉が、何故に鎌倉期の物語に取り入れられてきたかについても、自ずと理解できるであろう。

ところで、この〈小夜衣〉という歌語は、どのような背景の中から発想されてきたのであろうか。その点について考えてみるために、他の作品にその用例を求めてみる。

物語・歌集を含めて、管見の及ぶところでは、歌中に〈小夜衣〉の語が用いられているものは、六〇例を数える(『小夜衣』の一〇例は除いている)。その概略を示すと、物語作品にある一九例は、『源氏』一例、『狭衣』四例、鎌倉期の物語七作品に八例、御伽草子の五作品に六例、となる。また、和歌集には四一例であるが、そのうち『千載集』から『新統古今集』までの一二の勅撰集に三一例、他の一〇例は、『山家集』『拾遺愚草』など七つの私家集に認められる。それらの中で注目すべきは、物語では『狭衣』、和歌集では『拾遺愚草』が、各々四例と数の多いことである。その点に留意しながら、表現の方法について、六〇例を以下に検討してみよう。

まず、物語作品の用例を概観するために、表によってそれを示す。(表1参照)

(表1) からわかるように、歌語〈小夜衣〉は、物語中の歌においては〈重ねる〉(六例)、〈隔てる〉〈着る・馴れる〉〈返す〉〈夢おどろかす〉(各四例)などという縁語と共に詠まれていることがわかる。これらの縁語は、伝統的な〈衣〉からの発想に依るものがほとんどであるが、その中で、衣を砧で打つことから、〈うつつ夢おどろかす〉の縁語が、鎌倉以降に出てきているのが目をひく。また、〈隔てる〉の縁語が『狭衣』のみに、しかも四例が集中しているのは見逃せない。そこで、それらと比較するために、先に記した『小夜衣』での一〇例を、用いら

(表1)

(表1)			
源氏物語(総角) 狭衣物語(巻一)	縁語		計
	4	隔てる	4
	1	着る・馴れる	4
		返す	4
		重ねる	6
		恨(裏)み	2
	1	ぬれる	2
	1	かける	1
		つま(襪)	3
		匂ひ	1
		うつ	1
		夢	4
	《鎌倉期物語》		
松陰中納言物語 恋路ゆかしき大将 風に紅葉 我身にたどる姫君 言はで忍ぶ なると物語 夢の通ひ路物語			
	1		1
	1	1	1
	1	1	1
		1	1
			1
		1	
	1		1
《御伽草子》			
さよごろも付えんや物語 いそぎ 小伏見物語 ひめゆり しのばずが池物語			
	1		
	1		
	1	1	1
1	1	1	
1			
2			

(注) 以上の物語のうち、『狭衣』に四首、『風に紅葉』『小伏見物語』に各二首の例歌がある他は、すべて一首ずつである。

れている縁語に従って分類すると、次のようになる。

- (A) (衣・袖などを)重ねる——四例
 (B) (衣を染めることから、思い)染める——六例
 (C) (衣が二人を隔てることから、心を)隔つ——一例
 (D) (衣を打つことから、思いが)移る——一例

一首の中に二種類の縁語を含む歌もあるので、合計数は用例歌数を越えているが、右の分類でわかるように、『小夜衣』で最も多い縁語へ染めるは、他の物

語作品には全く認められないのである。さらには、一例ではあるが「隔てる」の縁語は、『狭衣』のみにあったものである。そこで、『狭衣』の四例について、検討してみたい。

(狭衣は、飛鳥井女君と)ひまなく(衣を)うち重ねて、(狭衣)「心より外に、隔て、つる夜な」のわりなきを。さは思給はでや。かばかり、人に心留むるものとも、まだこそ知らざりつれ」など語らひ給ひて、

(i)「あひ見ねば袖ぬれ、まさるさ夜衣一夜ばかりも隔てずもがな

かくわりなき心いられなどは、いつ習いけるぞよ」との給へば、

(ii)いつまでか袖ほしわびんさよ衣へ、だて多かる中と見ゆるを)

(iii)夜な／＼をへだて、まさらばさ夜衣身さへうきてもながるべきかな

と言ふも、物はかなげなり。(九五頁)

狭衣が飛鳥井女君と契る場面である。(ii)の歌は大系本の底本(内閣文庫蔵本)にはないが、同一系統の他の本にはあるので補った歌。ただし、他の系統の伝本にはない歌である。また、内閣文庫本系統にはないが、他の系統の伝本には、

(iv)隔つれば袖ほしわぶる小夜衣つひには身さへ朽ちや果てなん(日本古典全書『狭衣物語』(上)・二五六頁)

の歌が含まれているので、ここではこの歌も用例の中に加えている。

(i)は狭衣が飛鳥井女君に対して詠んだ歌で、残りの(ii)(iii)は、(i)を承けて飛鳥井女君が詠んだ歌である。

飛鳥井女君の詠んだ歌に異同が多いのは、飛鳥井女君の物語が、『狭衣物語』に登場する女性たちの中で、物語の中心的役割を担っているとは言えないまでも、夕顔の性格のこの女性に、作者は時に当初の構想を破りそうになるほど、相当に力を入れて描くことになったことと無関係ではない。つまり、それは物語の享受者側からの評判が良かったということであろうし、後に飛鳥井女君を中心とする物語が、改作の手によって御伽草子と称される作品の一つとして生き続けていくことでも理解されよう。

『狭衣物語』が『小夜衣』に与えた影響については、既に三谷栄一氏によって

冒頭描写の類似が指摘され(注12)、人物像の設定や場面描写では、後藤丹治氏が二三例(注13)、星野喬氏が一四例(注14)の類似点を列挙しており、類似点の多さは周知のところである。しかしまた、どれだけ多くの類似点が指摘されたとしても、

『小夜衣』が『狭衣』の中に氷解してしまうことはなく、『小夜衣』は『狭衣』とは異なったテーマ——継子物の型を襲いながら、人の情の重要さを描く恋物語——の許にその存在を主張しているのである。具体的な内容に深入りする余裕はないが、当面の課題である〈小夜衣〉の用法に関しては、『狭衣』には一篇所に集中して用いられていること、『小夜衣』にある縁語(隔つ)が、物語では『狭衣』にしかなく、しかも、(イ)の歌が詠まれる直前の地の文から、〈重ねる・隔つ〉という縁語表現が用いられていること、さらに何よりも、その後行方知れずになる飛鳥井女君とはかない契りを結ぶ狭衣、という構図が、思いもかけぬ契りを山里で兵部卿宮と結びながら、宮の意のままにならない状況によって、はかなく山里の姫君が姿を消すという『小夜衣』の物語とは、極めて類似した構図である。かつ、各々の場面で詠んだ、狭衣の歌(イ)と、宮の歌(1)とは、ほぼ同趣の技法でもある。以上のことを考えると、おそらく『小夜衣』の物語が発想されてくる源は、『狭衣』のこの場面を抜きにしては語れないであろう。

ところで、(表1)でもわかるように、物語中の和歌に見られる〈小夜衣〉の用例は、鎌倉期の物語以降、かなりの数にのぼっている。そこで、その用例をより詳しく知るために、和歌集について見てみることにする(表2を参照)。

(表2)に示した用例は、主に国歌大観の索引を参考にしながら分類したものであって、和歌の全てが網羅されているわけではない。しかし、右の表によって、歌語〈小夜衣〉がどのような縁語関係で使用されているかの見当は、ほぼつくであらう。以下、(表2)から窺える特徴を述べてみる。

『小夜衣』で最も多用されていた〈小夜衣〉の縁語〈染める〉の用例は、物語作品にも認められなかったが、同様に歌集においてもその例は見られない。その理由は不明であるが、伝統的かつ実際的な縁語と思われる〈衣を染める〉という発想が、『小夜衣』作者の意識には残っていたということも、あるいは考えられ

(表2)

	集														縁語	計	
	新後拾遺集	新葉集	新拾遺集	新千載集	風雅集	続後拾遺集	続千載集	新後撰集	続古今集	拾遺集	拾玉集	続後撰集	新古今集	秋篠月清集			
	四二五・六二〇	八五二	三三三・三六六	五二五・二〇六	四六六・三七六	九四四・六	五五五・七三二	四三三・七七一	四七四・四七三	八六九・九二二	四九七	七六	五九・一九六	九七	七九・八一		
返す	1		1	1	1	1	3	2	2	1	1				1	20	冒頭描写
夢	1		2				2	1	1	1	1			1	1	12	星野喬氏
恨(裏)み	1				2	2	2			1	1	1				12	後藤丹治氏
重ねる		1	1	1		1				1	1	1	1	1	1	11	三例(注13)
うつ	2		2					1	2	1					1	10	星野喬氏
つま(褌)				1							1	1				4	三例(注14)
隔てる			1			1					1	1				4	三例(注14)
(結の)音				1			1		1					1		3	三例(注14)
着る・馴れる		1					1						1	1		3	三例(注14)
かける														1		2	三例(注14)
匂ひ(香)	1															2	三例(注14)
ぬれる						1			1				1	1		3	三例(注14)
浅き(思ひ)															1	2	三例(注14)
(別る)袖																1	三例(注14)
詞書題	恨恋	寄衣恋	寄衣恋	契不來恋	契不來恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋	寄衣恋		

新統古今
集 五三・三七三

1 1 1 1

擣衣

(注) 歌集の下にある数字は、国歌大観の番号である。各々の歌集の例歌の数は、縁語の用例数とは必ずしも一致していない。詠題は記されているものについて付しておいた。

るかも知れない。勿論、偶然の結果かもしれないが、いずれにしろ『小夜衣』の特徴的用法であることに違いない。

一方、『小夜衣』に一例ある「へうつ」の用例は、物語作品中の和歌においても、鎌倉期までのものには認められず、御伽草子『ひめゆり』に一例を見るに過ぎなかった(表1参照)。ところが、歌集においては一〇例に及んでいて、衣の縁語として「へうつ」がほぼ定着していることがわかる、その内訳をみると、『山家集』(隔「里擣衣」・「拾遺愚草」(名所擣衣)各一例、『統古今集』(山家擣衣・名所擣衣)二例、『新後撰集』(擣衣)一例と、鎌倉期までに、すでに「擣衣」という題詠の許に「小夜衣」が連想される形が定着しているのである。その後の室町期の歌集においても、ほぼ同様である。ところが『小夜衣』の場合を考えてみると、「小夜衣うつれば変わるならひとて……」という表現であるから、厳密にいえばここは「移る」ということであって、「打つ」からの連想であることはわかるとしても、意識的に「擣衣」を詠んでいるのではなく、むしろ心の変化という点に重点を置いた表現である。その点で同じ「打つ」の表現ではあっても、歌集に見る用法とは同質ではなく、歌集例と比較して、『小夜衣』の方に多少の古さを感じる。

次に、『小夜衣』に一例がある「隔つ」の用法についてであるが、『狭衣』に四例が集中している点は既に述べた。歌集にも四例が認められるが、全体の用例数に比して、決して多い数ではない。それは「小夜衣」の縁語として「隔つ」の用法が、それほど流行しなかったということではないかと思う。しかし、少数ではあるが、そのうち次の二例は見逃せない。

(i) 思ふとは君に隔て、さよ衣なれぬなげきに年そかさなる、(『拾遺愚草』九一九、恋)

(ii) さよ衣恨みを人に重ね、つゝあはでやよゝを隔て、果つべき、(『拾遺愚草』員外 一四八、不逢恋)

この二首は、いわば題詠歌として定家が詠んだものであるが、その内容はいずれも『小夜衣』で兵部卿宮が詠んだ歌とはほぼ同一の趣向によっている。表現面においても、「隔つ」「重ねる」の縁語が、両歌ともにある。無論これだけを以って『小夜衣』と定家の歌との関連について確定的なことなど言えるとは思われないが、「隔つ」の用例が多いのならばともかく、他の縁語に比して極めて少ない上に、二例までが定家の作であること、また、その内容をも考慮すると、『狭衣』とともに『拾遺愚草』も、『小夜衣』の発想の上に、何らかの影を落としているのかも知れない。

次に、「重ねる」の用例をみてみよう。『小夜衣』には四例があり、比較的多い用法であったが、これは(表1)で示したように物語中の歌でも最も多い六例を占めていた。同様に歌集においても一例と、かなり多い数となっている。しかし、その内訳を見ると、そのうちの六例までが、『六百番歌合』『千五百番歌合』『新古今集』『拾遺愚草・員外』『拾玉集』など、一二〇一―一二二五年の間に成った歌集に集中している。その他は、その後百年を経て成立した『統千載集』以下に取り上げられることとなる。全体的に眺めた場合、「重ねる」の用法は、時代的に歌集のほぼ全般に亘って用いられているということになるのだが、(表2)に示し得た限りではその中間に百年の空白があり、前半部分には約三〇年ほどの間に六例が集中していること、さらには、(i)(ii)で示した『拾遺愚草・員外』の二首がその中に含まれていることは、やはり軽視できない点であろう。

「狭衣」の用例の少なさに比べれば、「小夜衣」の場合は、同じく「衣」の歌語でありながら、かなり多数の用例が認められた。縁語の種類も実に多く、その中には「返す」に代表されるように、絶えず用いられている縁語もある。しかし、「へうつ」のように題詠に組みこまれ、新たに「擣衣」の許に鎌倉以降、発想が定着してゆく縁語もある。そのような中で、『小夜衣』に用いられた縁語(染める)は、意外にも「小夜衣」の縁語としては他に例が認められず、「へうつる」

にしても「掛衣」の意識が充分に反映された表現とは認めにくい所がある。そして、何よりも「隔つ」の用法が、物語中の和歌では『狭衣』に四例が集中してあるのみで、歌集では四例中の二例が定家の歌であった。『狭衣』での唯一の「夜衣」の例は、「夜半の狭衣」と記されていた。「夜半の狭衣」とは、つまり「夜衣」のことである。「夜衣」が発想されてくる源に『狭衣』の存在があったこと、それは確かである。同時に、「夜衣」が歌語として確立してくる経緯・背景があった。多くの「夜衣」の用例がそれを物語っている。中でも、定家の歌との類似が目される。以上のような背景の中から、いわば「衣の系譜」を承けて「夜衣」という歌語は物語の題名となるまでの成熟を見たのである。そして、それらの状況からすれば、『夜衣』の成立も、『拾遺愚草』の成立以後、鎌倉中期までのころかとも考えられる。

四、『苔の衣』——「苔の衣」の背景とその源泉——

(1) 逢ふての恋も逢はぬ嘆きも、人の世に様々多か（な）る中に、苔の衣の御仲らひばかり、飽かぬ別れまでためしなく、哀なる事はなかりけり（注15）。

『苔の衣』のこの冒頭文は、言うまでもなく『夜の寝覚』型を襲ったもので、「夜の寝覚」を「苔の衣」に置き換えたに過ぎない。物語の筋も、純一な愛を貫くところに物語の重要な要素の一端があり、『寝覚』『狭衣』と類似の構想である。しかし、『苔の衣』の場合は、継子譚・利生譚を取り入れ、悲恋の末に出家遁世する主人公を描出するところに、時代相と共に作者の創作意図が認められるのであるが、その特質についての検討は後の機会に譲る。ここでは、物語の題名にまでなった「苔の衣」の語句が、どのようなプロセスを経て発想されてきているかを、その語句の背景を探りながら、論じてみたい。

まず、『苔の衣』の中で用いられている「苔の衣」の用例を確認しておく、五例が認められる。一例は右に引用した(1)の冒頭文の部分であるが、他の四例は巻三の終末部分に集中している。

(2) 「……かゝる身にだに忍び難く侍る山おろしのけはしさを、苔を衣としても

風を防ぎてのみ過ぎ侍る身ひとつだに悲しく侍るに、……。」（下・八九頁）
(3) 「……いみじからむ綾羅錦繡にも、苔の衣岩の枕は、こよなく替へまざりにはんべりぬべければ、……。」（下・九〇頁）

(4) いと口惜しと覚したる御けしきは、いひしらずめでたく。れ。の作法にとりまかなひて、やつし果て給ひぬれば、阿私仙の苔の衣着給ふとて、
(5) 色／＼に染めし袂をいまはとて苔の衣にたちぞかへつる

とぞながめられ給ふ。（下・九〇～九一頁）

以上の部分は、主人公の三位中将（右大将）が、北の方の死後に出家を決意し、人知れず横川へと世を逃れた場面である。(2)は、齢六十の老僧が修業の厳しさを述べる言葉で、それに対して、(3)は右大将が出家の意志が強固であることを述べる言葉、(4)は出家する場面、そして(5)は、出家を遂げた右大将の述懐の歌である。この(5)の歌は、物語の題名と深い関係にあるのであって、物語冒頭の(1)の部分で提示された「苔の衣の御仲らひ」の哀れさというのは、愛妻の死後、再び結婚することもなく出家していった主人公右大将の姿だったのである。「苔の衣」の用例の五例中四例までが右の場面に集中されているのも当然のことであった。

ところで、ここで言う「苔の衣」とは、法衣のことであるが、同じ衣でありながら、「狭衣」「夜衣」などのように、恋を予想させる表現とは言えない。にもかかわらず、物語の冒頭で「苔の衣の御仲らひ」とあるように、恋の様相を喚起させる響きがある。それは単に衣からの連想とか、恋の破局の末の出家というだけでは説明しきれないものが含まれているように思われるのである。以下、「苔の衣」の表現例を、主に和歌を中心しながら検討を加えてみる。

まず、勅撰和歌集について示すと、次のようになる。

→ 野小町
(1) 岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我れにかさなむ（後撰・一一九六・小

(2) 世を背く苔の衣は唯一重貸さねば疎しいぎ二人寝む（後撰・一一九七・僧正遍昭）

(3) 棚ばたの苔の衣を厭はずば人なみ／＼に貸ししてまし（金葉・一六九・能因法師）

(4) 奥山の苔の衣に比べ見よいづれか露の置きまさらとも (新古今・一六二四・権大納言師氏)

(5) 白露のあした夕におく山の苔の衣は風もさはらず (新古今・一六二五・如覚)

(6) 世をそむく山の南の松風に苔の衣や夜さむなるらむ (新古今・一六六一・安法師)

法師

(7) 夜な／＼の泪しなくば苔衣秋おく露のほどもは見てまし (新後撰・一三〇〇・前大納言為家)

前大納言為家

(8) 岩の上の苔の衣も埋もれずたゞひとへなる今朝の白雪 (玉葉・九四九・常盤井入道前太政大臣〈実氏〉)

入道前太政大臣〈実氏〉

(9) なほざりに思ひもいらば苔衣重なる山をいかでわけまし (玉葉・二四六七・右近少将通忠女)

近少将通忠女

(10) 御熊野の南の山の瀧つ瀬に三年ぞ濡れし苔の衣手 (玉葉・二七七・法印良守)

(11) 苔衣猶袖寒し身の上にふりゆく霜を払ひ捨てゝも (続千載・一七九一・藤原経清朝臣)

清朝臣

(12) 重ねても月やは疎きいはがねの苔の衣の秋の白露 (続後拾遺・一〇二七・信実朝臣)

朝臣

(13) 袖ふれし音は昔に隔て来て花にぞ疎き苔の衣手 (風雅・一四六〇・從二位兼行)

(14) 苔衣袖のしづくを置きながら今年もととりつ草の上の露 (風雅・一五一九・後西園寺入道前太政大臣〈実兼〉)

西園寺入道前太政大臣〈実兼〉

(15) 秋を待たで思ひ立ちにし苔衣今より露をいかで干きまし (風雅・一九三四・後伏見院御歌)

後伏見院御歌

(16) 思ひやる苔の衣の露かけてもとの涙の袖や朽ちなむ (風雅・一九三五・永福門院)

(17) 月影の秋は夜さむになりぬとも誰かは打たむ苔のさ衣 (新千載・五〇九・蓮生法師〈宇都宮頼綱〉)

蓮生法師〈宇都宮頼綱〉

(18) 袖の上に今朝しも露の置きそふは苔の衣に秋や立つらむ (新千載・一七五三・後西園寺入道前太政大臣)

後西園寺入道前太政大臣

(19) 梅が枝に苔の衣の袖ふれて花の名をさへ折る我が身かな (新千載・二二四九・

良運法師)

(20) 思ひ入るいはほの中の苔衣なほ捨て難き世こそつられけ (新統古今・一八七二・前大納言為家)

前大納言為家

以上、勅撰和歌集に見られる二〇例を列挙してみたが、その多くは法師、及び出家した者によって詠まれた歌である。(7)は〈露〉、(8)は〈雪〉、(12)は〈月前苔〉という題のもとに詠まれた歌で、(18)とともに植物の苔が扱われているもの、または、そのイメージの強い歌であるが、数は少ない。その他の多くは〈法衣〉の意味で〈苔の衣〉が用いられており、その点では詠者の多くが出家の身であったのも当然といえる。その中で、(3)と(14)とは〈七夕〉の題のもとに詠まれた歌で、機織り↓衣という連想によるのであろうが、右の例の中では特異である。

以上のように、〈苔の衣〉の用例は、そのほとんどが〈苔の如き法衣〉の意味で用いられていて、用法上は『苔の衣』の場合と同じである。

ところで、〈苔の衣〉の語句に関連して『苔の衣』の物語が発想されてくる源を考へる場合、右の二〇例の中にある贈答歌の存在が注目される。贈答歌は、(1)と(2)、(4)と(5)、(15)と(16)の三組である。『風雅集』の(15)(16)は、「御ぐしおろさせ給ひて秋の始めつ方永福門院に奉らせ給ひける」の詞書きがある後伏見院の歌と、その返しであるが、出家した折の心境を詠んでいるという点で『苔の衣』の場合と似る。また、『新古今集』の(4)(5)は、「少将隆光横川にまかりて頭おろし侍りけるに法服遣すとて」の詞書のある師氏の歌と、それに応えた隆光(如覚)の歌であるが、詞書に〈横川〉とあるのが『苔の衣』と同じである。少将隆光がどのような経緯で出家したかの詳細は知らないが、隆光の歌は『高光集』にも含まれている。また、贈答歌で最も注目されるのは、『後撰集』の(1)(2)の、小野小町と僧正遍昭との贈答である。この歌については、都合上、勅撰和歌集以外の歌に認められる〈苔の衣〉の用例数を示した後に改めて論じてみる。

勅撰和歌集以外での〈苔の衣〉の用例数は次の通りである。和歌の引用は繁雑になるので、数値のみを示す。

小町集 二例(小町の歌と、遍昭の返歌)

- 遍昭集 二例（小町の歌と、遍昭の返歌）
 古今六帖 一例（小町の遍昭に対しての歌）
 大和物語 二例（小町の歌と、遍昭の返歌）
 宇津保物語 一例（国譲・下・水尾法師仲頼）
 安法法師集 一例（前掲(6)の新古今の歌に同じ）
 高光集 一例（前掲(5)の新古今の歌に同じ）
 長秋詠藻 一例（上・一二・更衣）
 金槐和歌集 一例（「屏風に奈智のみ山書きたる所」）
 拾玉集 二例（巻一・秋、巻二・雑「苔為三石衣」）
 風に紅葉 一例
 新葉集 一例（巻一七・二品法親王深勝）
 住吉縁起 一例（住吉明神）
 玉造物語 二例（小町の歌と、遍昭の返歌）
 ふせやの物語 一例（にはひの君）
 しぐれ 一例（中将入道）
- 以上、ほぼ時代順に列挙してみたが、その数は二一例となる。しかし、そのうち約半数の九例が、実は前掲(1)(2)の小野小町と僧正遍昭の歌なのである。小町と遍昭のこの贈答歌は、各々の家集だけでなく、『大和物語』にもかなり長文の説話として取り入れられ、さらに、御伽草子『玉造物語』という一編の物語として発展していくのである。その源である(1)(2)の歌は極めて重い意味を持っているといえる。また、『苔の衣』の語句を考える上にも、重要な位置を占めている。結論的に言えば、『苔の衣』物語が発想されてくる源には、おそらく小町・遍昭の贈答歌と、その背景にある物語があったであろうということである。以下、その点について論じてみよう。
- 各々の歌の異同は、小町の歌で『古今六帖』が下句「苔のみ衣暫かさねよ」とあり、遍昭の歌が『遍昭集』で初句「山伏の」、『大和物語』で一本に四句目「貸さねばつらし」、『玉造物語』で初句「世をいとふ」、四句目「貸さねばつらし」

となっているが、全体としては大きな異同はなく、前掲の『後撰集』(1)(2)で記した表現と大差ない。

小町の歌は、『小町集』の詞書によると、

いそのかみといふ寺に詣でゝ日の暮れにければ明けて帰らむとてかの寺に遍昭ありと聞きて心みに言ひ遣る

という背景のあったことがわかる。『後撰集』の詞書もこれと同様の内容であるが、『遍昭集』になると詞書は大幅に増加され、良少将（良岑宗貞）が出家して遍昭となるまでの経緯、及び、妻子が遍昭の行方を求めて初瀬寺に詣でて泣き悲しむ場面が、小町登場以前の部分に語られている。『大和物語』（一六八段）では、それがさらに整理されていて、首尾一貫した説話が形成されている。『遍昭集』と『大和物語』との先後関係は、従来、説の対立する所であって、容易には決し難いのであるが、いずれにしても、『小町集』から『遍昭集』『大和物語』を経ることによって、『苔の衣』を中心歌語とした小町と遍昭とのこの贈答歌が、人々の印象に深く残るところとなり、さらには遍昭が出家するに至る情況とその後の行動、そして、それを嘆き悲しむ妻子の姿と、それを目の当りにしながらも耐え通す遍昭の姿とを含み込んだ一編の説話として定着していくのである。その結果、『苔の衣』という語句を採る時は、少なからずこの説話が意識されていたことは想像に難くない。まして、『苔の衣』を題名として一編の物語を成そうとする場合は、なおさらのことである。事実、『苔の衣』において、『苔の衣』の語句を集中的に用いて、ひそかに出家を果たした右大将の姿は、遍昭の場合と酷似しており、また、右大将が娘の瀕死の際にふと現われて祈禱し、その命を助ける部分は、遍昭が妻子の悲しむ姿を見ながらもあれほどまでに耐えていたにもかかわらず、後に、子の将来を案じて法師となることを勧めるという心情の動きに類似する。以上の事柄から、『苔の衣』という表現、及び『苔の衣』物語の発想の源には、小町と遍昭の贈答歌、さらには遍昭の説話に依るところが大きかったであろうと思うのである。

もとより、物語その他の作品について、その影響関係を論じることが、決して

容易なことではない。一つの作品が誕生する背後には、様々な要素が作者の胸中に渦を巻いていることは当然なのであり、ある作品の存在が、他の作品を誕生させたのだとか、ある作品は、他のある作品の模倣によって成立したのだ、などということは、軽々しく言うてはならないことである。『苔の衣』の場合、冒頭文は『寢覚』からの拝借であり、

琴の音はすぐれて雲居に澄み昇りて、月の都の人も聞き驚くらんかしと聞こゆるに、（上・七四頁）

更けゆくまゝに笛の音澄み昇りて、狭衣の大将の一人に行かん天の原と、吹きすまし給ひけん笛の音も、これには及ばじや。誠に月の都の人待たるゝ心地して、（上・二四頁）

という表現を初めとして、直接間接に『狭衣物語』を意識し、場面や文章を剽窃している所は、相当数指摘できる。これだけでも、『苔の衣』が『寢覚』『狭衣』からどれほど影響を受けているかということは、明白なのである。〈苔の衣〉という表現に限っても、飛鳥井女君の兄の山伏が狭衣と話す言葉（巻二、二三頁）及び、父堀河の大殿が狭衣の言動を不安に思う心中思惟（巻四、三四四頁）に二例認められる。『宇津保』にも、忠こそ登場の所と（吹上・下、三七頁、仲頼に絡む場面（国譲・下、二八二・二八四頁）とに三例があり、いずれも出家の身の哀れさを訴える表現として用いられている。しかし、『源氏』にはこの語句は見当らない。『小夜衣』の所でも述べたように、当時の人に人氣のあったと思われる飛鳥井女君の物語の中で〈苔の衣〉という表現が用いられていることなどから、この語句の面でも『狭衣』との関係は見逃せない。

〈狭衣〉〈小夜衣〉は恋のイメージを担う語句であるのに対して、同じ〈衣〉ではあっても、〈苔の衣〉は異質である。そこに『苔の衣』の特異性があるのであって、衣の系譜とは言っても、『小夜衣』と全く同様に論じることではない。それは、各々の物語が発想されてくる源の違いによるのであり、同時に、それぞれの物語が意図している究極的テーマの相異ということになる。しかし、それにも関わらず〈衣〉という語句に固執しているのは、単なる偶然ではない。〈小夜

衣〉〈苔の衣〉ともに、『狭衣』に数度に亘って使用されていることが重要なのであって、各々の語句が物語の題名として昇華する直接の引き金として、『狭衣』が存在していたことは認めなくてはならない。

ところで、〈苔の衣〉という表現の背景を更に知るために、その類似表現を示してみると、次の如くである。衣と関連のある表現としては、〈苔の袂〉二三例、〈苔の袖〉一五例がある。その他は、〈苔の下〉四九例、〈苔の筵〉三〇例、〈苔むす〉三〇例、〈苔ふかし〉一二例、〈苔生ふ〉一一例、その他に、〈苔……〉と苔に関わる表現は八一例、以上の合計は二五一例となる。この数値は、厳密な調査の結果とは言えず、今まで管見に入った限りの数値であって、しかも和歌に限定しての数量である。それにしても、苔に関わる表現がいかに多いかということ、は、理解できるであろう。これを作品別に主なものを挙げると、『新古今』一七例、『拾遺愚草・員外』一六例、『拾玉集』一三例、『新後撰』一三例、『玉葉』一五例、『風雅』一五例となつて、これらは他の作品における用例数に比して群を抜いている。しかも、『風雅』を除けば、全て鎌倉期に成立した作品となり、おおよそその物言いをすれば、苔にまつわる表現が鎌倉期に多用されていたということになる。その理由としては、鎌倉期以降に仏教が一段と興隆を見せること、その要因が武家政権の中に含まれていたという、政治・社会の情勢を考えてみなくてはなるまい。〈苔の衣〉という表現も、そのような状況の中にあつて初めて人々の心に強く意識され、物語の題名となるまでの語句として再生されていったのであろう。

五、結語

『狭衣物語』という題名は、それ以前の物語名と比較して、やはり特異な命名である。つまり、物語の記述方法がそうであるのと同様に、〈狭衣〉という表現も、歌語を十分に意識することによって発想されたものである。この傾向は、その後の多くの物語によって継承され、あたかも一首の和歌に着想を得て、物語として展開されていったとさえ思われるような題名を持つ作品も、決して少

なくはないのである。〈昔の衣〉〈小夜衣〉という表現についても、それは言える。極言すれば、〈狭衣〉という表現は、それ程までに呪縛を含んだ語句であったということである。特に『小夜衣』の場合は、既に述べたように、その語句の背後には様々な表現が使用されてきたのだが、一編の作品として完成するに至る強力な直接的な磁場は『狭衣物語』であり、『狭衣』の中で狭衣と飛鳥井女君とが契る印象的場面に集中的に使用されていた〈小夜衣〉の表現であった。

『昔の衣』の場合は、発想の源として小町・遍昭の贈答歌、及び『大和物語』に完成を見た遍昭の説話を見逃すことはできないが、〈昔の衣〉が物語の題名として凝縮してくる直接的な引金としては、『小夜衣』と同様に、『狭衣』の強い影響を認めざるを得ない。〈衣の系譜〉と銘打った所以でもある。

しかし、以上の考察によって、『小夜衣』や『昔の衣』について全てが解消したわけでは無論ない。むしろ、そのような系譜を経て発想されてきた物語であるにもかかわらず、各所に種々の影響を受けながらも、『小夜衣』は継子譚を中心として一編が結構され、『昔の衣』は利生譚や継子譚を取り込みながらも一途に出家を志し、成し遂げる主人公の姿にその主題は集約されているのである。発想の要因は同様の所にありながらも、完成後の作品は、その枠組みも主題も、異質な姿を主張しているのである。既に、単なる影響関係を云々するだけでは覆い切れない世界が、そこには存在するのである。

擬古物語という名称で一括されて、絶えず影響を与えた作品の側に立って、その後の物語を論ずる風潮が今もなお強い。擬古という捉え方はもとより、上から見下ろす見方では、所謂擬古とされる物語の本当の姿は見極め切れまい。何よりも、これほどまでに多くの作品が出現する原因の在処が見えてこないのである。

以上に述べた点に対して、単なる場面や文章上の影響関係ではなく、『昔の衣』『小夜衣』が発想されてくる源を探ることにより、各々の作品の世界を窺おうとしたのがこの論である。だが、それぞれの作品の世界を説くためには、更に、時代背景との関連を保ちながら、より作品世界に密着して述べなければならないので、その点については次の機会に論じてみたい。

注

(1) 本文の引用は、日本古典文学大系 三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』による。以下同じ。五二頁。

(2) 八四頁。「ありし『狭衣』の後は」と、狭衣が以前に詠んだこの歌を回想する場面においてである。

(3) 当然のことながら、〈衣〉の用例、さらには衣と関連する〈袖・袂・紐〉といった用例は、枚挙に暇がない。しかし、ここでは〈さ衣〉の用例のみに絞って考えてみる。

(4) (3)の歌は「つれなかりける女に遣しける 右近大將道綱」として『新勅撰集』巻一・二・恋二・七三に載る。ただし第五句「世をや尽さむ」。

(5) 「むすぶべきつにもあらぬさ衣にうかれん玉をいかととめん」(古典文庫『我身にたどる姫君』(上) 一四〇頁)

(6) 『狭衣物語』の成立は、「ほぼ延久・承保年間(一〇六九～一〇七六ごろ)、白河初期にしばらくおとくる」とする三谷栄一博士の説(注一 同書、解説二二頁)に従う。

(7) 他の二例は、『新拾遺集』巻九・七九八、法印長辨「篋枕夜はの衣をかへさずば夢にもうときみやこならまし」と、『新後撰集』巻一・八七八、大江広茂「思ひ寝の夜の衣をかへしても慰むほどの夢をやは見る」である。

(8) 〈夜半の衣手〉の他の二例は、『続千載集』巻一・一三二九、後二条院「限りあれば今ぞ重ぬるせき返し涙に朽ちし夜半の衣手」と、『新拾遺集』巻九・七九九、源業氏「草枕露打ち払ふそのまゝに涙片敷く夜半の衣手」である。

(9) 『小夜衣』に関しては、三谷栄一編『体系物語文学史』第四卷「物語文学の系譜Ⅱ・鎌倉物語Ⅰ」所収「小夜衣物語」(有精堂)において論じたことがあるので、参照していただきたい。なお、そこで述べたことが、論の展開上ここでも繰り返して述べている所があることを断っておく。

(10) 『小夜衣』の本文は、清水泰校註『校註異本堤中納言物語』(昭和三年、竜谷大学国文学会発行)による。ただし、表記を私意により改めた部分がある。三〇(三一頁)

(11) 残りの五例は次の通りである。(兵部卿宮↓対の君「浅かりき色と恨みぬさよ衣ふかくは誰か染めまさるらむ」(八七頁)、(帝↓対の君「浅くこく何に染むらむ小夜衣いづれの色といかで知らまし」(同)、(対の君↓帝「浅きこき色とも知らず憂き身には涙にくちしさを衣を」(同)、(帝↓対の君「……ありし文の小夜衣にや重ぬらむものを……」(一四九頁)、(帝↓対の君「はかなくも思ひたちける小夜衣重ぬ袖のなにしほらむ」(同)。

(12) 三谷栄一氏「物語の成長―巻頭描写の展開」(『物語文学史論』所収)

(13) 後藤丹治氏「異本堤中納言と小夜衣」(『国語と国文学』第五卷第五号)

(14) 星野喬氏「小夜衣難考」(『立命館文学』第一卷第一号)

(15) 『昔の衣』の本文は、久曾神昇校、古典文庫により、適宜漢字をあてた。上巻、一頁。